

13. フェアリへの冒険

各務原市立中央小学校

6年 河村 しおり 戸崎 萌花 大塚 竣介
高木 翔吾 丹羽 萌花 宮部 明歩



敦賀市立中郷小学校

6年 山崎 麻理

不死鳥や妖精などが住む世界フェアリが、今崩れようとしている。そして、二人の少女が立ち上がる。

この物語は、フェアリを救う二人の冒険を描いたものである。

「行ってきます！」

翔は、家を飛び出した。今日は、幼なじみの千里の家に遊びに行く日だ。

（おい、そこの人間！）

急いで走る翔の頭の中に声がひびく。翔は辺りを見回した。

（我はここだ！）

「えっ、えっ、えっ？ もしかして、この鳥？」

（この鳥とは何だ、この鳥とは！）

目の前で羽ばたいている不思議な色の鳥は、翔に向かって確かにそう言った。——とは言っても、鳥のくちばしは動いていない。テレパシーで伝えてきているようだ。翔はしりもちをついた。

「えっ？ しゃべってる！ こんな鳥、本で読んだ不死鳥しか知らないよ」

目をまん丸にして、翔は言った。

（……なぜ我を不死鳥と分かったのだ、人間）

「えっ？ 本当に不死鳥なのー」

不死鳥は、翔の質問を完全に無視して、

（とりあえず、一緒に来い！）

不死鳥—その名をザークというらしい—は、金色の目をきらりと光らせて言った。

千里は、家でクッキーを作りながら、翔のことを待っていた。

「うーん、翔、まだかなあー。もしも忘れていたら……」

怒りで、だんだん表情が変わっていく。

「たたきのめす！」

千里は家の中をどかどかと歩きながら、外へと出て行った。

「もう、翔はいったい何をしてるんだー」

ぶつぶつ言いながら歩いていると、一分も経たないうちに、翔だけでなく何やら見たこともない鳥を見つけた。

（あの人間は、だれだ？）

その不思議な鳥も、千里を見つけた。

「あっ、千里ー。ちょっと、どうしてここに居るんだよ」

翔は、千里が探しに来たことを知らない。

「ちょっと、約束の時間に遅れておきながら、何言ってんのよ。それから……その鳥、何？」

（また、その鳥と言うか……）

ザークは、少し機嫌を悪くしたようだ。

翔は、二人（？）のやりとりを見ていた。

「翔！」

（人間！）

千里とザークは、同時に翔に向かって叫んだ。キレている千里とザーク。二人は、似ているのかも知れない。

翔は、二人の間に立って、さっきまでの出来事を説明した。

「でも、不死鳥？ あり得ない……」

千里は、さっきまでの怒りが収まり、今度は、目の前の状況をのみ込むことに意識がいつている。

（何だ、その人間は。性格が変わってないか）

ザークもまた、千里のことを受け入れるのに時間がかかっているらしい。

「で？ さっき、（一緒に来い）って言ってたけど、どこに行くの？」

（我々の世界だ）

「我々？」

「仲間がいるの？」

二人は同時に聞く。

（そうだ。我以外にも、不死鳥や妖精の仲間がいる。我には、仲間がいなかったか？）

「いないと思った！」

笑顔で同時に答える二人。

ザークは、感情で体の色が変わるらしく、今は……赤い。どうやら、怒っているようだ。

（……まあ、いい。時間がない。我的世界に来てもらうぞ）

「ザークの世界は、どんな所なの？」

自分の世界を問われ、ザークの体は元の色に戻った。

（澄んだ空気と、よどみのない水の流れ。穏やかな場所だった。しかし、その世界が滅ぼされようとしているのだ）

「どういうこと？ ぼくたちにそれを話しているってことは、まさかー」

翔はそう言うと千里を見た。千里もまた、翔を見て、二人はうなずいた。

「うん、行こう！」

（では、目をつぶって我の羽を握れ）

ザークは自分の羽を二枚はぎ取り、二人に渡した。

（その姿勢で待っている）

ザークはそう言うと、ふわりと羽ばたいた。

(行くぞ！)

そのまま待つ二人。

何も変わった様子はない。しかし――。

(着いたぞ。ここが我的世界、フェアリだ) ★

「え？ ここがフェアリなの？」

二人は首をかしげて、じっと景色を眺めていると、

(ようこそ。我的世界、フェアリへ)

急に二人の頭の中で声が響く。

辺りを見回すと、ザークの仲間たちが、並んでいる。

「ねえザーク。本当に仲間がいたんだね！」

千里と翔は、笑ってザークの方を見ると、

(ああ。そうだよ！)

と、ザークは体を真っ赤に染めて、怒っている。

「まあまあ、落ち着いて」

と、ザークの仲間のある鳥が言った。

(ああ、こいつを紹介するのを、忘れていた)

ザークが言った。

翔と千里は笑いを止めて、ザークと仲間の方を見た。

(こいつは、ルーク。私の幼なじみだ)

ルークが

(よろしくねっ)

と、二人に言った。

すると、次は、大きな声が頭の中に響いた。

(よく来たな。翔、千里)

なぜか目の前が明るくなった。

「うっ！ まぶしい」

それは一瞬の出来事だった。

辺りがちゃんと見えるようになった。

目を開けると、そこにはザークの二倍もの鳥がいた。

「誰？ この鳥……」

二人はザークに聞いた。

(――)

何も返事が来ない……。

ザークの姿を探すと――

ザークが二倍もの鳥にお辞儀をしている……。

(皆！ 顔を上げたまえ)

また、大きな声が頭の中に響いた。

(ははあ)

ザークたちが、二倍もの鳥に言った。

(翔、千里。我はこの世界の大王だ！)

(……)

「そうだったんだあ！」

翔と千里は驚いた様子で、うなずいていた。

(なぜ、この世界に来たか、分かるか?)

二人は、大王に聞かれた。

「はい！ 分かります！」

(なんだ。言ってみな)

「はい。この世界、フェアリが滅ぼされようとしているため、僕たちが救うために、選ばれここに来ました」

(そうだ！ その通りだ)

大王は笑ってうなずいた。

翔と千里は嬉しそうに顔を合わせた。

(さあ早速なんだが……)

大王は小さな声に切り替えて、

(なぜこの世界が滅びようとしているか。それは、隣の世界のボルフェアが土地を奪おうと必死に、攻撃してくるのだ……。それで空気は汚れ、住むところはとても住める状況ではない。だから、ボルフェアに、君たち二人で、攻撃してきて欲しいのだ……)

大王はしょんぼり言った。

翔と千里は顔を合わせてうなずき、

「分かりました！」

と言った。

「で、武器などは？」

大王に聞くと、

(そんなものないさ！ テレパシーで攻撃するのだ！)

「でもそんなこと……」

二人が、うじうじしていると、

(大丈夫だ！ 君たちは選ばれたたった二人の、フェアリを救える者なのだから！)

大王に励まされた翔と千里は、

「はいっ」

と元気な声で返事をした。

自信のついた二人は、早速準備に取り掛かった。

隣の世界まで行く機械に乗っていざ出発！！

(着いたぞ！)

ザークが言うとフェアリより何倍も美しい世界があった。

「すごい」

そう言った瞬間、

「！」

頭の中で、“きーん” と鳴った。

「何？ これ……」

ザークに聞くと、
(これは、相手の攻撃だ！ これの二百倍もの強さでフェアリが、滅びてしまいそうになっているのだ……そ……それじゃあ……頑張ってくれ……)

その言葉を残して、ザークはどこかに消えてしまった……。

「ど……どうする？」

千里が、不安げに翔に聞いた。

「ここは大王の言う事を聞いて、テレパシーで攻撃だ！」

「うん！」

「いくぞおー！ テレパシー開始！」

二人は一気にテレパシーをボルフェアに打ち込む。

しかし、なかなか消えない……。

「どうする？」

千里は、翔に不安げに言った。

「大丈夫！ 僕たちは選ばれて来たのだから」

その言葉に勇気もらった千里は、

「ねえ。心を一つにしてテレパシーを送れば、いいんじゃない？」

千里は言った。

「それじゃ……。二度目のテレパシー開始！」

二人は、心を一つにして、できると信じ、ものすごい勢いでテレパシーを送った。

すると、みるみるボルフェアがボルフェア人と共に消えてゆく……。

「やったあ！」

(危ない！)

突然、ザークの声が聞こえた。

フワッと感じたと思ったら、なぜか来るときに乗っていた機械に乗っていた。

二人は首をかしげて、パッと思い出した。

「フェアリは元通りになった？」

ザークに聞くと、

(翔と千里のおかげで元通りになったさ！)

その言葉を聞くと嬉しくて嬉しくて機械に乗っているのを忘れて、飛び跳ねていた。

ガクンと、衝撃がはしった。

目を開けると、翔と千里は千里の家の前にいた。

「なんで？ ここにいるの？」

すると……、

(おかげで元通りになったよ！ ありがとう)

と、耳元で聞こえた。

二人は顔を見合わせ、ニコッと笑い、

「このことは二人だけの秘密にしよう」

と、千里が言うと、

「うん！ そうだな！」

と、翔が言った。

このことは永遠に二人だけの秘密になった。
いつまでも。いつまでも——。